

## 平成24年度第1回北海道食の安全・安心委員会BSE専門部会の概要

1 日 時 平成24年11月19日

2 場 所 かでる2・7 720研修室

3 出席者

- (1) 専門部会 部会長 一色 賢司 北海道大学大学院水産科学研究院教授  
特別委員 小倉 豊 北海道肉用牛生産者協議会会長  
佐々木一司 北海道食肉事業協同組合連合会会長  
塩越 康晴 北海道消費者協会 主査  
堀内 基広 北海道大学大学院獣医学研究科教授  
(現食品安全委員会<sup>7</sup>リウ専門調査会専門委員)
- (2) 道 側 農政部食の安全推進局土屋局長、花岡生産技術担当局長、奥田家畜衛生担当課長、保健福祉部高橋食品衛生課長ほか

4 概 要

(1) 報告事項

道側から北海道食の安全・安心委員会（以下「委員会」。）でBSE専門部会（以下「部会」。）の設置を決定した経過、委員の選定経過と紹介、委員会で検討依頼を行った「道のBSE対策のあり方について」の資料を説明。

【委員からの主な意見】

- ・ 非定型BSEに憂慮している。
- ・ 非定型BSEは世界でも60数例であり、十分な知見はない。しかし、非定型であっても、定型と同様、若い牛ではプリオンはたまらない。
- ・ 国民が安心できるような体制づくりには感謝している。

(2) 検討事項

ア 道側から「BSE国内初発時」、「省令改正により検査対象月齢が21か月齢以上となり、さらに3年の経過措置が切れ、道が自主的に20か月齢以下の検査を継続した当時」、「ピッシングが禁止され、日本がOIEで「管理されたリスクの国」に認定された当時」の情勢を説明し、道が行ったBSE検査などの取組について委員から意見を聴取。

【委員からの主な意見】

- ・ BSEの感染原因は今もはっきりしないのが不安。
- ・ BSEの原因とされる異常プリオンは遺伝子検査などの従来手法で検査ができない。完璧な原因究明は今後も不可能と思われる。しかし、初発生以降の対策で10年以上、国内で新たな感染例はなく、これが国内に感染源はなくなったという科学的証

拠。

- ・ これまでの飼料規制などによる原因物質対策、SRM除去と焼却、トレーサビリティの結果、全頭検査で陰性が続いている。このため、検査だけによるものではなく、トータルでリスク管理は順調に推移している。

イ 道側から、厚生労働省が年内に開催を予定している説明会の場を活用し、道民から意見を聴取する案を提示し、委員から意見を聴取。

#### 【委員からの主な意見】

- ・ 食品の安全性に関わる問題で、検査の実施は全国一律にしてもらわなければ困る。各県で足並みがバラバラだと風評被害にもつながりかねない」と指摘。
- ・ 道産牛肉の9割以上は本州方面に出荷している。全国的な考え方も聴取してほしい。
- ・ 北海道の動きは全国的に注目されており、生産者や消費者の意見をどう捉えるか、全国に発信する上でも重要。
- ・ パブコメはインターネットが主体であり、参加は限られると思われるので、新聞広告など行ってはどうか。若い者から高齢者まで幅広い意見を集められるよう工夫が必要。
- ・ 「①全国に道産牛肉が出荷されることを踏まえ、道外の他の自治体との関係を例示して意見を募る、②最終的な道の意見の取りまとめに当たっては、インターネットだけではなく、広く、積極的に意見集約する手段を工夫する」よう総括して指摘があった。

### (3) その他

#### ア 委員からの意見

- ・ BSEの検査ばかりが注目されているが、SRMの除去が大事であるということが忘れ去られている。検査以前にBSEについて正しい知識を広める努力をすべき。

イ 道側から、厚労省からのパブコメ、説明会を受けて、年明けには全国自治体の対応方針が判明することから、年明けに第2回の専門部会を開催する予定であることを報告、日程調整について了解を得た。